

## 闇の中におられる主

[使徒言行録 16 章 19～34 節]

ところが、この女の主人たちは、金もうけの望みがなくなってしまったことを知り、パウロとシラスを捕らえ、役人に引き渡すために広場へ引き立てて行った。そして、二人を高官たちに引き渡してこう言った。「この者たちはユダヤ人で、わたしたちの町を混乱させております。ローマ帝国の市民であるわたしたちが受け入れることも、実行することも許されない風習を宣伝しております。」群衆も一緒になって二人を責め立てたので、高官たちは二人の衣服をはぎ取り、「鞭で打て」と命じた。そして、何度も鞭で打ってから二人を牢に投げ込み、看守に厳重に見張るように命じた。この命令を受けた看守は、二人をいちばん奥の牢に入れて、足には木の足枷をはめておいた。真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた。突然、大地震が起こり、牢の土台が揺れ動いた。たちまち牢の戸がみな開き、すべての囚人の鎖も外れてしまった。目を覚ました看守は、牢の戸が開いているのを見て、囚人たちが逃げたしまったと思い込み、剣を抜いて自殺しようとした。パウロは大声で叫んだ。「自害してはいけない。わたしたちは皆ここにいる。」看守は、明かりを持って来させて牢の中に飛び込み、パウロとシラスの前に震えながらひれ伏し、二人を外へ連れ出して言った。「先生方、救われるためにはどうすべきでしょうか。」二人は言った。「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたも家族も救われます。」そして、看守とその家の人たち全部に主の言葉を語った。まだ真夜中であつたが、看守は二人を連れて行って打ち傷を洗ってやり、自分も家族の者も皆すぐに洗礼を受けた。この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。

### [1] 教会と讃美歌—私の礼拝原体験

教会と讃美歌、礼拝と讃美歌は切り離すことが出来ません。連想ゲームで「教会」と聞くと「讃美歌」とイメージする人は多いです。「結婚式」も多いかもしれませんが。私も音楽を聴くことが好きでしたから、ある意味讃美歌に心を惹かれて教会の礼拝に出席し続けたという側面もありました。けれども讃美歌というものは、例えばカラオケで歌うような歌とは違うと思いますね。カラオケで歌う歌が悪いという訳ではなく、讃美歌というのは、神様を讃美する歌です。流行歌はどちらかというと、自分が喜ぶ歌だと思います。思い出すのは、私は19歳の時、初めて教会の礼拝に参加し、老若男女が、声が揃っているとか外れている

とかを超えて、この歌声には何かがある、自分が持っていないものがある、自分が知らないものがあると思いました。そして、それは「歌」なのですけれども、まるで光のように眩しかったのです。それは私の教会の礼拝の原体験です。

## [2] 不幸の連鎖を断ち切る主イエスの福音

今日の聖書箇所使徒言行録 16 章でとても印象的なのは、フィリピで伝道していたパウロと仲間のシラスが、言いがかりをつけられた後、迫害され牢獄に入れられたのですが、その牢の中で真夜中に賛美を歌っていたとあるその描写ではないでしょうか。そして、その歌は、そこにいた者たちの心にも響いていたのだと思います。実際聖書は「ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」と書いています。また、恐らくは現場にいたであろう看守も耳にいただろうと思います。そしてそこから奇跡と思えるような出来事が生じます。余程大きな地震が起きたということなのだと思います、二人の足枷が外れ、他の囚人たちの鎖も外れてしまいます。看守は彼らが逃亡したと思い込んで、このままではローマ帝国から罰を受けると思い、いっその場で死んでしまおうと思い詰めてしまったのです。けれどもパウロが毅然と言いました。「私たちはここにいる。自害してはいけない！」と。すると看守は「救われるためにどうすべきでしょうか」と聞きました。この時のパウロの言葉はとても有名ですね。使徒言行録 16:31 です。—「**主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます**」。

江戸川区にあるバプテスト連盟篠崎キリスト教会の川口通治（みちはる）先生が説教の中でこのようなことを仰っていてなるほどと思ったのですが、「もしこの時、看守が自害していたら、その家族はどうなっていたでしょう」と。「古代社会においては社会保険も生活保護ありません。働き手を失った家族は将来を悲観して自殺したかもしれません。しかしパウロと出会い、（看守の）家族全員がパウロの勧めに従って洗礼に導かれたのです。一人の人の救いが、家族への救いにもつながりました」と語られました。これは大事なことだと思います。

キリスト教の救いとは、自分さえ救われればあとはどうなっても良いということではなく、一緒に生きる者たちの救いを目指すのですね。責任の追及というのは、人を責めるというのは、正しいようでいて人を不幸にします。許しがたい世界は不幸の連鎖を生み出すのではないのでしょうか？ パウロが良く手紙の中で「共に福音にあずかる」と言い方をしていますが、そこにはクリスチャンの自立と、共に生きる者たちへの責任ということもあるのだと思います。とても大事な視点ですよね。このあとの描写は美しいと思います。34 節です。—「この後、二人を自分の家に案内して食事を出し、神を信じる者になったことを家族ともども喜んだ。」これまでになかった、質の違う喜びがそこにはあったことでしょう。

### [3] 祈りが歌となって

このような人生の変革こそが奇跡だと言えますが、そのきっかけになったのはパウロとシラス(シルワノ=ニコリント 1:19、一ペトロ 5:12 と同人物)の**賛美**ですね。こういう所からクリスチャンはいかなる逆境の時も主を讃美する心を失ってはならないという勧めが出てきます。決して間違っていないと思うのですが、私自身は、そう出来ない時だってあるのではないかなと思うのです。

皆さんはどうお考えになるのでしょうか？(こういう所を分ち合うことが出来るためにも「黙想」の時間というのは大事だと思っております)。パウロとシラスはこの時、讃美歌を歌いたい気持ちに溢れて讃美をしていたのかどうか…。聖書を注意深く読んでみると、二人は賛美歌を歌ったとは書いてありません。この当時いわゆる賛美歌集などはないのです。25 節で、二人は「**賛美の歌をうたって祈っている**」と書いてあります。二人は「**祈って**」いたのです。私は思いました。今この当時讃美歌集はなかったと言いましたが、楽譜はないですが、素晴らしい賛美歌集があったのです。『詩編』です。主イエス様はしばしば詩編の言葉を口にされましたよね。それはイエス様の祈りでした。この時も恐らくは、パウロたちは、暗唱していた**詩編の言葉を祈りとして歌っていた**のではないのでしょうか？「**グレゴリオ聖歌**」と言われる西洋音楽の原点の歌も、殆どは詩編の言葉なのです。紀元一桁の時代の修道士たちが、詩編の言葉を繰り返し唱える内、それが呼吸と共にメロディが付いていったというのが起源だと聞いたことがあります。

パウロたちは逆境を跳ね返すだけの強い信仰があったから、神様はここで奇跡を表わされたのだと考えなくても良いと私は思っています。パウロもシラスも体は鞭打たれ、痛みが消えなかったことでしょう。そして灯りなどないような、夜は闇の石の牢獄に閉じ込められ、足枷まではめられ、これからどうなるか分からない。恐れがない訳はないのですね。むしろこの時大地震が起これば一貫の終わりの筈です。二人は祈ったのです。祈らざるを得えなかったと言っても良い。それでいいのですね。**弱さをそのままさらけ出せば良い**のです。いや、それが信仰に生きることだと思います。**賛美を歌う**というのは、“**神様への**”叫びなのです。それを神様は無視しない。むしろ**そのような闇の中にこそ、主イエスはおられる**ことを私たちは信じる事が出来ると思います。**主イエスは、闇の中にこそ来て下さった光**です。**クリスマス**の出来事です。そして私たちが、主の名の故に心を合わせる所、その中にイエス様はおられる。「**教会**」とはそういう所、また私たちの**家庭**の中にも、主は確かに**おられる**のです。祈りが**ある**ところ、どこにでもです！

### [4] 深い地の底も御手の内にあり。

私は今日の宣教の準備で 2010 年のペルーのコピアポにあるとサンホセ鉱山での落盤事故の奇跡的な出来事を調べていて、とても励まされたのです。当時とても大きなニュースになりました。33 名の鉱夫が地下 700 メートルほどの所に閉じ込められ、もうだめだと絶望視されていたのですが、約二ヶ月後に全員が救出されたその出来事ですが、こういうことが分かりました。8 月 5 日に事故が起こり、二週間ほど経ってやっと全員がシェルターの中で生きていることが分かった。それから二か月程救出にはかかりました。地下に閉じ込められた鉱夫たちに物資を補給するため、地上から細いチューブを使って物資を送り込みました。一番心配なのは、パニックが起こることです。その意味で、ルイスというチームリーダーは見事だったらしいです。お互い否定的な言葉は一切口にせず、とにかく励まし合って、食料も皆が平均 8 キロ程痩せるほどでしたがちゃんと分け合ったので誰も犠牲になりませんでした。ペルーは 80%がカトリックで、12%ほどが福音派だそうです。その鉱夫のマリオという人は地下でも聖像を置き、礼拝所を作りました。またホセは福音派の牧師でもあって、鉱夫たちために日々の祈りを行ったと言います。次々助け出される鉱夫たちは、地上から贈られた茶色の T シャツを緑色のつなぎの上に着ていました。その背中には、詩編 95 編4節の言葉がスペイン語でありました。「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂きも主のもの」。…何という証しか！ と思いました。これは極限状況だけのことではありませんね。私たちの人生そのものではないかと思えます。—「深い地の底も御手の内にあり、山々の頂きも主のもの」。これこそ「賛美」でなくて何でしょう。主は、今生きて、この私と共におられる。弱い私と共におられる。また、あなたと共におられる。その T シャツの左腕には“JESUS”、右腕にはスペイン語と英語で「サンキュー・ロード」ともプリントされていたそうです。私たちもそういう T シャツは着なくても、この二つの言葉をいつも心に携えていたいと思いました。

「救われるためにどうすべきでしょうか」。大事な問いです。けれど、何もする必要などないのですね。ただ「主イエスを信じなさい！」このお方に信頼してよいのですよ、とパウロは言っています。これを語るためにパウロは命を懸けたのです。私たちも、十字架の主イエス様が私のすべてとなって下さったということ、私たちの人生のどんな地の深いところも御手の中にあることを、み言葉から教えて頂いて、ご一緒に励まし合いながらこの世の旅路を進んで行きたいと思えます。使徒言行録の出来事は、今日も続いているのです。

お祈りを致します。

「二人、また三人がわたしの名によって集まるところにはわたしもその中に入る」。主よ、あなたのお約束を感謝致します。……。